The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大戦間期イギリスにおける大陸モダニズムの受容 ：ライマン産業・商業美術学校
Author(s)	菅, 靖子
Citation	デザイン理論. 2005, 46, p. 150-151
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53310
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大戦間期イギリスにおける大陸モダニズムの受容
── ライマン産業・商業美術学校 ──

菅　靖子／津田塾大学

1934年に誕生したカウンシル・フォー・アート・アンド・インダストリー（CAI）は，1937年のパリ万国博覧会でイギリス展示館の建築から展示まで，イギリスの国家的表象の場の全デザインを任された。しかし，その結果は一般・専門家の両方から厳しく批判された。イギリス展示館の展示デザインが最も他国より遅れており，「ドラマティックな側面はほとんどみあたらなかった」からである。いかにモダニズムを「見せる」か，そしてそれを通して「モダン」なイギリスを効果的に演出できるか，というプレゼンテイションの問題はイギリスにとっての大きな課題であった。CAIでは同年11月に「プレゼンテイションと展示に関する小委員会」を設置し，問題を検討することになった。複数の方面への聞き取り調査を通じて，展示デザインの質の改善策を検討した結果，イギリスの「大いなる希望」であるとみなされたのは，ライマン産業・商業美術学校であった。

この学校は，アルバート・ライマンが1902年に，モダン・アートの原理を商業や産業に応用する必要性を感じてベルリンに開いた私塾から始まり，1930年代のナチスの勢いに追われてロンドンにあらためて開校されたものである。ベルリンのライマン・シューレでは，とりわけ商業美術に関する科目が発達し，1920年代までに展示デザインの領域で名声を確立している。

この学校では，バウハウスの織物工房のゲオルグ・ムッヒェ，写真学科の主任ヴァルター・ペーターハンスらも教鞭を執った。また積み木玩具のデザインで知られるアルマ・ブッシャーや映画製作者ヴェアナー・グレーフ，日本からの水谷武彦などはライマンで学んだ後にバウハウスに入学している。日本人では他に向井寛三郎，笹川和子がライマンで学んだ。バウハウスで学んだハインツ・レーヴは後にロンドンのライマン・スクールで展示学科の主任となった。

1920年代後半からライマン・シューレは，20世紀初頭から店頭の商品の展示方法の稚拙さが指摘されていたイギリスで注目を集め始めた。これはドイツでのナチスの台頭と時を同じくしていた。ユダヤ人であったライマン一家はユダヤ系の教員や学生を集めてロンドンに移住し，そこで新たに学校を開校したのが，ライマン・スクールである。

ロンドンでは，教員スタッフの半分はベルリン時代の教員であった。校長にはオースティン・クーパーが就任した。彼によって，イギリスの「非常に種類に富んだ分野から最高で最も活気のある非常勤スタッフ」── E・M・コーファー，エリック・フレイザー，ミルナー・グレイ，マリオン・ドーン，また後のポップ・アートの旗手リチャード・ハミルトンなど── が集められた。

ロンドンのライマン・スクールは教育方針は基本的にベルリン時代を踏襲していたが，イギリスにおいてそれは伝統的な美術教育からの「脱皮」と捉えられた。展示，商業美術，ファッションおよびドレスメーキング，写真，そして一般教養の五学科で出発し，三六年にはインテリア・デザインが加わった。学科は緩やかに連携しており，多様な表現メディアや素材を体験させる方針から，科目は比較的

自由に選択できた。ライマン・スクールおよびステューディオの目的は，「一般化した芸術教育と，商業美術と産業デザインにおける専門的な実践の特殊化した要求とのあいだの認識されている溝の架け橋となる」ことにあった。展示デザインを総合芸術として教えた点が，当時のイギリスでは先駆的だったのである。

同校が開校してまもなく，CAI はパリ万国博での不評を分析して，「わが国には展示の技法やショーマンシップを訓練された人間がいない」ことに起因したと結論づけ，さっそく「プレゼンテイションと展示に関する小委員会」を結成した。この委員会はさまざまな美術学校や企業へのヒアリングを行い，ライマン・スクールからは校長であるクーパーと展示デザインの責任者レーヴの二人を呼び，同校の教育の特徴を検証した。

彼らと委員会との議論から，イギリスの問題点がいくつか明らかになっている。イギリスでは従来，展示デザインは建築家に任せる傾向があり，委員の中には，建築の訓練こそ三次元的な展示デザインに必要なのではないかと主張する人たちもいたが，クーパーとレーヴは，建築家は空間を作るが製品や商品の展示と建築とはまったく違うという見解に立っており，ライマン・スクールでは表層的な建築の訓練以上のことは行っていなかった。彼らは，建築を教えるために不必要に訓練機関が長引く上に，より良いのは展覧会において建築家が展示のエキスパートと共同作業をすることだと考えた。もうひとつの争点は，ライマン・スクールが表現する軽快なモダニズムであった。CAI の委員たちは，その進歩性を認めながらも，それが未だに保守的傾向の強かったイギリスの商業美術や展示の現状にどれだけ適用できるものなのかについての懸念を持っていたのである。こうした議論を通して，また実践を通してライマン・スクールは，展示デザインをこれまでの伝統的な建築の分野からではなく，学際的に発展した新たな領域として捉えたことで，イギリスに新しい視座を提供することになった。

ライマン・スクールは1939年までの短い存続期間に700名ほどの学生を送り出し，彼らはラウントリー・チョコレート製造会社，インペリアル広告エイジェンシーなどイギリス各地で活躍した。また公的な機関の広報を依頼されることも多く，逓信省やＢＢＣ，ニュー・ヨーク万国博でのイギリスの展示館の一部などの展示デザインを請け負っている。モダンなイギリスの表象を担ったのである。第二次大戦が勃発するとライマンは解散した。しかし，ＢＢＣのステューディオ・デザイン・ユニットの責任者となった元教師など，ライマン・スクールが輩出した人材は確実にイギリス社会の視覚文化へ働きかけていった。

この学校は両大戦間期イギリスの商業美術，モダニズムの理論と実践，そしてデザイン教育の要に位置していたといえる。